

28 C型慢性肝炎に対するインターフェロン (IFN) 治療効果の予測因子の検討

瀧本 光弘・坂内 均・渡辺 俊明
済生会三条病院消化器科

C型慢性肝炎に対するIFN治療に関し、血清の γ GTPとALTの比で治療効果の予測が出来るという主旨の論文をドイツのグループが99年のJ. of Medical Virologyに発表した。今回我々は当院におけるC型慢性肝炎に対するIFN治療効果の予測因子をこの比を含めて数種の因子について、解析、検討を行った。

症例は当院に於いて1992年4月から現在までにIFN治療を行った慢性C型肝炎患者112例を対象に解析を行った。血清の γ GTPとALTの比と治療効果の関係は、論文が示した様な著効群で無効群に比較し γ GTPとALTの比は低値といった関係は認められなかった。当院での解析では、治療効果に影響を与える因子は、ウイルス量、遺伝子型、F因子であった。

II. 特別講演

「肝細胞癌発症の分子機構と治療法の開発」

山形大学第二内科
河田 純 男

第26回リバーカンファレンス総会

日時 平成14年3月16日(土)
午前9時～
会場 新潟ユニゾンプラザ
大会議室

I. 一般演題

1 30年後に肝再発を来したと考えられる脈絡膜原発黒色腫の1例

吉村 朗・和栗 暢生・須田 剛士
高橋 達・野本 実・朝倉 均
野本 重敏*

新潟大学第三内科
同 皮膚科*

症例は72歳女性。既往歴として40歳時に左眼球摘出術を受けているが詳細は不明であった。1999年秋、肝機能異常を契機に受けた腹部超音波検査でS8に4cmの内部に嚢胞成分を伴う腫瘤を指摘された。CT、MRIではS4にも腫瘤を認めたが確診つかず、この時点での腫瘍生検でも確診がつかなかった。その後一年以上腫瘤は増大傾向を示さなかったが、二年後に増大し、数も増加した。血管造影上S8の病変は乏血性であったが、他の病変は富血性で肝細胞癌様の血行動態を示した。腫瘍生検ではメラニンと考えられる黒色の色素を多量に含有し、抗S-100及びHMB-45が陽性の異型細胞集団を認め、黒色腫と診断された。諸検査でも原発巣は不明であったが、破棄寸前であった30年前の記録を入手したところ、左眼球摘出の原疾患は脈絡膜黒色腫であった。本症例は眼球摘出術後30年後に黒色腫の肝再発を来したと考えられ、また、1年間腫瘍が増大傾向を示さなかった点が特異であると考え報告する。